

「君、顔に出過ぎだ」

振り返ると先生は腕時計を直しながら私を見下ろしていた。その表情は相変わらず読めない。けれど、声の響きにはほんの僅か、呆れとも心配ともつかない色が混ざっていた。私は反射的に言い返していた。

「あの相手の態度、あまりにも失礼です。こちらの主張をまるで価値がないみたいに笑うなんて、法廷に対する冒瀆です」

語気が強くなった自覚はあった。だけど止められなかった。感情が言葉を追い越していく。先生は少しだけ目を細め、私の顔をじっと見つめた。それから、ほとんど吐息のような声で言ったのだ。

「……そんな顔で煽った君が悪い」

その瞬間、廊下の空気が変わった。彼の声は低く静かで、それでいて私の肌の表面をざらりと撫でるような熱を含んでいた。私は何も言えず、ただ彼の眼鏡の奥の瞳に見つめ返すことしかできなかった。あの目は、法廷で相手を追い詰める時の鋭さとは違う。もっと原始的で、剥き出しの何かがちらりと覗いていた。心臓が跳ねた。

怒りとは別の感情が、腹の奥で熱を持って渦を巻き始めるのを感じた。

九條遼一先生は業界でも指折りの敏腕弁護士で、事務所の誰もが憧れと畏怖を込めて名前を口にする存在だった。私が彼のアシスタントとして働き始めて一年、常に完璧な距離感を保ち必要以上に踏み込まず、それでいて的確な指示で私を育ててくれた。そんな彼が、私の前でだけ見せる表情があることを知ったのは、つい最近のことだ。最初は偶然だと思った。深夜の事務所で、誰もいないと思って机に突っ伏して泣いていた時、彼がそっと背中にブランケットを掛けてくれたことがあった。その時の彼は何も言わず、ただ私の頭を一瞬だけ撫でて自分の部屋に戻っていった。あの時の指先の温度が、今でも時々思い出される。次に気づいたのは、彼の視線だった。打ち合わせ中私が相手の主張に熱くなって早口になる時、彼はいつも薄く笑って私の唇を見ている。書類を手渡す時に指が触れると、ほんの一瞬だけ彼の手が止まる。そういう小さな違和感が、積もり積もって確信に変わるまでにそう時間はかからなかった。

そして今日、あの言葉だ。『そんな顔で煽った君が悪い』という言葉は、法廷での私の態度を責めているだけではなかった。あれは、明確な合図だったのだ。私は廊下で立ち尽くしたまま、彼の背中を見送ることしかできなかった。胸の奥がきゅうと締め付けられ、頭

の芯がじんと熱くなる。この感情に名前をつけてはいけない気がして、けれど身体はとつくにその熱を覚えていて夜になるのが怖いような、待ち遠しいような妙に落ち着かない心地でその日を終えた。

その夜、私は事務所の自席で残業をしていた。今日の裁判の記録をまとめ、明日の打ち合わせ資料を整える。普段なら没頭できる作業なのに、指先が時折止まっては、昼間の先生の声が頭の中で反響した。あの低い声が、耳の奥に張り付いて離れない。コピー機の前に立ったままぼんやりしていると、背後でドアの開く音がした。振り向く前に空気の動きでわかる。彼だ。スーツの上着を脱ぎ、ワイシャツの袖をまくった姿で九條先生が部屋に入ってきた。眼鏡は外していて、前髪が少しだけ額にかかっている。その姿を見た瞬間、心臓が痛いくらいに跳ねて私は無意識にコピー機の縁を握りしめていた。

「まだいたのか」

彼は私の手元を見て、それから私の顔を見た。目が合う。今日の法廷での彼とは違う、柔らかくて深い色をした瞳だった。

「はい、あと少しだけ……先生こそ、お戻りになられたんですか」

声が少し上ずった。彼は答えず、ゆっくりと私に近づいてくる。その歩みは静かで、まるで夜の帳が降りるように自然だった。気づけば彼は私のすぐ目の前に立っていて、私はコピー機に背中を預ける形になっていた。心臓の音がうるさい。彼のシャツから、ほのかに煙草と、彼の部屋に焚かれているらしいウッディな香りがした。

「君は、本当に無防備だな」

彼の手が伸びてきて、私の耳にかかった髪をそっと払う。その指先が耳の輪郭をなぞるように動いて、背筋に甘い痺れが走った。

「こんな時間に、こんな顔で、私の前にいる。煽っている自覚はあるのか」

昼間と同じ言葉を、今度はもっと低くもっと近くで囁かれて、頭の奥がじんと痺れる。反論しようと口を開いたのに、声が出なかった。彼の指が私の顎に触れ、上向かされる。眼鏡のない素顔はいつもより若く見えて、けれどその目に宿る熱は年齢よりもずっと雄弁で、私の身体の芯を震わせた。「九條先生、私……」

「もう、その口で私の名前を呼ぶな」

彼はそう言って、親指で私の下唇をそっとなぞった。その感触だ

けで、膝が震えそうになる。理性が溶けていく音が、頭のどこかで聞こえた気がした。

彼の指が私の唇をゆっくりと割り開き、その感触を確かめるように動く。私はされるがままに、ただ彼の瞳を見つめていた。目の奥が熱い。身体のあちこちが、彼に触れられたいと疼いている。そんな自分が恥ずかしくて、けれど目を逸らすこともできなかった。彼の顔が近づいてくる。吐息が混ざり合う距離で、彼は囁いた。

「今から、君に触れる。嫌なら今すぐ言え」

その言葉は、最後の逃げ道をくれるような優しさを含んでいた。だけど私は、小さく首を横に振ることしかできなかった。それを合図に、彼の唇が私の唇を塞いだ。最初は触れるだけの、まるで確認するような口づけ。けれど私が彼のシャツの胸元をぎゅっと握ると、彼は低く息を漏らして角度を変えてもう一度深く唇を重ねてきた。舌がそっと入り込んできて、私の舌を探り当てる。口腔の熱が混ざり合い、頭の中が真っ白になる。ちゅくちゅ、と水音が静かな室内に響いて、その音を自分たちが立てているのだと思うと、下腹の奥がきゅうと切なく疼いた。彼の手が私の腰に回り、コピー機の冷たい感触と彼の掌の熱が同時に背中と腰を襲う。その温度差に身体が震えると、彼は唇を離さないまま私の身体をぎゅっと抱き寄せた。

心臓の音が、彼にも伝わっているかもしれない。それくらい密着していて、彼の胸板の硬さと、その下で刻まれる鼓動が私の胸に重なった。

「……苦しい」

ようやく唇が離れて、私は酸素を求めて浅い呼吸を繰り返した。彼は私の額に自分の額をくっつけて、荒い息を整えながら、私の背中をゆっくりと撫でる。その手つきは、まるで暴れそうな自分自身を宥めているようでもあった。

「続きは、場所を変えるぞ」

彼の声は掠れていていつもの冷静さが薄れている。私はただ頷くことしかできず、彼に手を引かれるまま、薄暗い廊下を歩いた。繋がれた手のひらが汗ばんでいるのは、私だけではないようだった。

彼の個室のドアが閉まる音が、やけに大きく響いた。鍵をかける金属の音がして、私は無意識にごくりと唾を飲み込む。部屋の中は暗く、窓から差し込む月明かりだけが彼のデスクや本棚の輪郭を青白く浮かび上がらせていた。彼は私を窓際のソファまで連れて行くと、私の肩をそっと押して座らせた。そして私の前に膝をつき、真

っ直ぐに私を見上げてくる。その体勢に頭がくらりとする。いつも法廷で相手を睥睨する彼が、今、私の前に跪いている。それだけで身体の奥がじわっと熱くなった。

「君が、私の理性を壊した」

彼はそう言って私の手を取り、指先に唇を寄せた。人差し指、中指、薬指と一本ずつ丁寧に口に含んで、舌を這わせる。その度に背筋を電気のような快感が走り抜けて、腰が浮きそうになる。

「せ、先生……やめて、汚いです」

「汚くない」

彼は顔を上げて、私の目をじっと見た。

「君のすべてが、私を狂わせる」

その言葉に胸がぎゅっと締め付けられる。彼の手が私のブラウスのボタンに掛かり、ゆっくりと外していく。月明かりに晒された鎖骨を、彼の指先がなぞる。私は彼の髪に指を差し入れ、縋るように掴んだ。彼の唇が首筋に落ちる。皮膚を吸い上げられる感覚に、声が漏れる。それから彼はブラウスを肩から滑り落とし、下着の上か